成都市街戦の再現

――李劼人と田聞一の語り――

中　裕史

はじめに

中華民国期の中国は、各地に割拠する大軍閥が省をまたいで中原の覇を競う混沌とした状況にあった。そうした中で、四川における軍閥の特徴について、成都生まれの歴史学者である唐振常は、以下の三点を挙げて説明を行っている。第一に、「四川には、本当の意味で全域を統一し、かつ長く維持した特大の軍閥はなかったし、まして四川の外に進攻することなどできず、ただ夔門の内側で英雄と称しただけだったこと」、第二に、「四川に特有の防区制」、第三に、「二十余年の間に、四川軍閥の混戦の回数が最も多く、時間も最も長かったこと」[1]である。

唐振常が指摘するように、四川には省全体をまとめる力をもった軍閥はなく、中小の軍閥が、それぞれ防区とよばれる根拠地を占有して兵士を集め軍費を調達して、あるいは防区を争い、あるいは四川における覇権を求めて、各地で果てしない抗争を繰り広げた。こうした抗争は、有力軍閥の一人である劉湘が、蔣介石の支持

二

のもとに、劉文輝との決戦に勝利した一九三三年九月まで続き、合わせて四百回余りにわたった。[2]

このように、いつもどこかで軍閥の抗争が勃発している状況にあって、抗争の舞台となった四川の各地は言うまでもなく大きな損害を被ったが、省政府の所在地であった成都もまた例外ではなかった。成都は、市内を銃弾や砲弾が飛び交う市街戦を三度経験している。

一度目は、四川に進入して成都に駐留していた雲南軍を、一九一七年四月に、四川軍閥の劉存厚が駆逐した戦いであり、二度目も、同年の七月に、劉存厚がやはり成都に駐留していた貴州軍を撃破した戦いである。

これら二度の市街戦が成都市民にもたらした損害は、『四川軍閥混戦（一九一七―一九二八）』によれば、一度目が、死傷者三千人余り、略奪に遭った家一一九四戸、焼失・破壊家屋七八〇戸、二度目が、兵士の死亡者三六四人、負傷者六二一人、市民の死亡者一一〇人、負傷者三一〇人となっている。[3]

しかし、劉文輝と田頌堯の戦いとなった三度目の市街戦による被害は、前の二回を遥かに上回り、後述する田聞一によれば、両軍兵士の死傷者は約一万人、死傷者が最も多かった少城一帯の市民の死傷者は三万人余りとなっていて、[4]この市街戦が、成都の街と市民に大きな災厄をもたらしたものであったことがわかる。

文学はこの大事件をどのように扱っているのであろうか。

最も規模が大きかったこの三度目の市街戦に関しては、四川作家である李劼人が、戦後まもない一九三六年に回想文を書いており、また七十年余り後の二〇〇六年には、田聞一が小説の形式で再現を試みている。執筆時期が大きく隔たっていて形式も異なっているこれら二作品においては、もちろん叙述の内容にも方法にも大きな相違がある。しかし、四川作家がどのような立場から、どのような語りによって、成都にとっての歴史的大事件を再現しようとしているのかについて検討していくことは、作家の個性を突き詰めていく上でも、ひいてはその集合体としての四川作家の特性を明らかにする上でも、必要なプロセスであろう。

小論では、前述した二人の作家の語りに着目して、その方法や対象、および目的について詳細に考察することによって、作家の個性を、四川作家全体の特性の中で捉えてみたい。

一「省門の戦い」の経過

成都の市街地が戦場となり、かつ被害が最も甚大であったこの三度目の市街戦は、「省門の戦い」とも呼ばれている。ここでは、この戦いがどのような状況下でおきて、どのような経過をたどったのかについてまとめておきたい。

市街戦発生当時の成都は、劉文輝、鄧錫侯、田頌堯三軍閥の共同管理下にあった。一九二四年五月に北京政府によって督理四川軍務前後事宜に任ぜられて[5]、成都に拠っていた軍閥楊森が四川統一戦争を発動したことに反発して、各軍閥は貴州軍と連合軍を形成して楊森軍を壊滅させ、楊森を湖北に放逐した。その時成都に入城したのが上記三軍閥であった。

単独で成都を支配するだけの力をいまだ有しない三軍閥は、協議の結果、一九二六年十二月に統率弁事処を設立し、劉文輝を処長、鄧錫侯と田頌堯を副処長として、成都の管理を行うこととした。翌年に四川の各軍閥が易幟して国民革命軍となり、劉文輝が第二十四軍、鄧錫侯が第二十八軍、田頌堯が第二十九軍となると、統率弁事処はこれら三軍の連合弁事処と改称された[6]。

こうした微妙な均衡状態は、その後、劉文輝が、甥である劉湘との協力の中で次第に防区を拡げて勢力を増大させていくと、維持することが難しくなっていった。一九三二年には二大勢力となった劉文輝と劉湘の間で「二劉決戦」が行われるが、その直前の各軍閥の勢力は、李白虹「二十年来之川閥戦争」によれば、成都に拠

四

る劉文輝が、川南諸県を中心に川西・川北・川東・西康などの八十一県を防区として十万人の兵士を擁し、重慶に拠る劉湘が川東から湖北西部にかけての四十六県を防区として九万人の兵士を擁しているのに対して、やはり成都に拠る鄧錫侯は川西および甘粛南部の十七県の防区と四万人の兵士、川北の潼川に拠る田頌堯は川北と川西に二十八県の防区と五万人の兵士というように、[7]二劉と鄧・田とでは大きく差が開いてしまっていた。

叔父・甥の関係にある劉文輝と劉湘の戦いは、一九三二年十月に、劉湘と手を組んだ小軍閥の羅沢州と李家鈺の軍が川北の順慶を攻撃したことによって始まった。重慶の劉湘軍も動き出して長江沿いに西へ向かい、劉文輝の防区に対する攻撃を開始した。

これに対して、劉文輝は、鄧・田を筦絡しようとしたが果たせず、主力を主戦場である川東・川南に向けるために、成都に前進司令部を置いて相応の軍隊を配している田頌堯を叩いて後顧の憂いを絶とうとして、巧みな情報工作によって田軍の作戦計画を予め把握し、十一月十四日に攻撃をかけてきた田軍に逆襲をしかけて緒戦の勝利を手にした。[8]ここから成都市街を戦場とする「省門の戦い」が始まる。

戦いは、この後、九眼橋近くにある、西南地方最大の兵器工場である四川兵工廠や、旧皇城にある、城壁よりも高く市内市外を一望できる煤山などを主戦場として、同月二五日まで激戦が繰り広げられた。数において勝る劉文輝軍の攻勢を支えかねた田軍は城北の一隅に追い詰められたが、鄧の調停によって、成都を退出して川北の防区に引き上げることを得た。ひとまず後顧の憂いを絶つことに成功した劉文輝は、前線である川南方面に精鋭を急派したのであった。

二　李劼人による再現

「省門の戦い」から四年が過ぎた一九三六年に、李劼人（一八九一～一九六二）は『危城追憶』を書いてこの戦いを振り返っている。[9] なぜ四年後なのかと言うと、その「序」に、成都市民である李劼人が、同年十一月に、市外の景色を楽しもうと思って城壁に上ってみたところ、そこに土塁が置かれていることに気づいて、自身や友人の遭遇を含む、たくさんの面白い出来事を想い起こしたのだと記されている。

「序」に始まるこの回想文は、順に「公館のため」、「戦地は屋根の上」、「兵をつかまえる」、「開戦前の一瞥」、「飛行機が本当に来た」、「煤山を奪うこと煤山を均すこと」という六つの文章によって構成されている。

簡潔に内容について触れておこう。

「公館のため」は、「省門の戦い」が終わって劉文輝軍の主力が成都から前線に移動した隙をつくように戻ってきた田軍が、市内のあちこちで劉文輝軍の兵士の捜索を行っているのを、李劼人自身と友人が劉文輝軍による市民の拉致と思い違いをして逃げ回った際に、劉文輝軍の将校の公館を守るために射殺された兵士と巻き添えで負傷した市民を目撃したことを語る。

「戦地は屋根の上」は、市街戦の前線となった少城地区の住人である曽先生の居宅に劉文輝軍の兵士が乱入して、屋根の上に重機関銃を据え付けると、田軍と激しい銃撃戦を展開し、曽先生一家は逃げることもならず台所の隅で身を寄せ合い、兵士の食料を分けてもらってどうにか生き延びたことを語る。

「兵をつかまえる」は、田軍が成都から退出した後、戦争の際の様子を尋ねようと親戚や知人の家を訪れた李劼人が歩いて自宅に戻る際に、劉湘軍との戦いに向かう劉文輝軍が兵士や軍夫を補充するために始めた市民の拉致に遭遇したが、自身は辛うじて免れたことを語る。

「開戦前の一瞥」は、食料を十分に買い込んで戦争に備える李劼人が、自宅に泊まり込んでいる友人の用を足すために二人で街に出ると、あちこちに土塁が築かれ塹壕が掘られて通行が許されず、遠回りに遠回りを重ねてようやく自宅にたどり着けたことを語る。

「飛行機が本当に来た」は、自らの見聞として、「省門の戦い」の最中に、劉湘軍の偵察機が姿を現して成都上空を二十分ほど旋回して東へ飛び去ったが、その翌日、一機の爆撃機がその偵察機に先導されて飛来し、二個の爆弾を見当違いの場所に落としたことを語る。

「煤山を奪うこと煤山を均すこと」も、自らの見聞として、前述の軍閥による煤山の争奪戦の状況と、市民にも大きな損害を与えることとなった根本の煤山から、市民たちの手で石炭がらが運び出されて平地にされてしまう様を語る。

以上の概観から見て取れるように、李劼人は、身をもって市街戦を経験した成都市民の一人として、戦前・戦後の状況も含めて「省門の戦い」について、自身の見聞を中心にして、そのありのままを語ろうとしている。そして、兵士の生命を奪い、市民を巻き添えにしても、競い合うことをやめない軍閥の非道に対する批判を込めながら、戦時下における市民の特殊な経験や市民の視線でとらえた兵士の表情、戦前・戦後の市民の生活ぶり、初めて見る飛行機の飛来、二度と戦争を繰り返さないようにするための市民の知恵といった、市民に密着した語りを展開している。

次に、李劼人の語りについて具体的に分析していくことにするが、この『危城追憶』によって、李劼人は、被害者としての成都市民を語りながら、その実、生死のかかる極限の状況にあってもなお生きることを楽しもうとする成都市民の不思議な余裕を記録しようとしているように思われるのである。

三　李劼人の語り

一九三二年十二月後半のこと、劉文輝軍の主力が劉湘との決戦に備えて続々と成都を出発していった後に、いったんは川北に去った田軍が再び南下して、成都のすぐ北の新都県まで達した時、成都市民は、先月のような市街戦になることはありえないだろうと言い合っていた。

「われわれの考えでは、そこまで馬鹿ではないはずだ。」

「まして彼［成都の留守を預かる劉文輝軍の師団長康清］の公館は西丁字街の一つだけじゃない。九龍巷の立派な邸宅ですらこれほど守備していないよ。」

「もちろんだ。特別守る必要など本当にない。われわれ四川の軍人はこのことについては賢明なのさ。内戦なら内戦するし、勝ち負けなら勝ち負けがあるだけ。でもお互いの財産となると、暗黙の了解があって、妄りに動かすべからずさ。だから、みんな安心して門を閉ざして戦うんだ。」

「まして金目のものはすっかり運び出してあるし、眷属も他所に落ち着けてある。空っぽの公館のためだけに、自分の兵士に血を流させたり、庶民をまた脅かしたりはしないさ。」

「確かに。確かに。いろいろ考えると、康久明［久明は康清の字］がわれわれよりも賢明でないことはありえない。これっぱかりの留守部隊だから、二十九軍が入城する前に、さっさと撤退するだろう。市街戦の動きは、絶対に二度とないだろう。[10]」

右は「公館のため」の語りである。

市民の議論を通じて、李劼人は、四川軍人の「賢明さ」を語っている。成都の留守を預かる劉文輝軍の師団長康清が、田軍の接近に備えて予め財産と家族を安全な場所に移してあるという事実と、数において勝る田軍と交戦することはないであろうという予測とによって、康清の「賢明さ」を示しているのである。

しかし、実際には、康清は撤退しないまま、入城してきた田軍との間で銃撃戦が行われて、兵士にも市民にも死傷者が出る事態となった。李劼人は、「公館のため」を次のように結んでいる。

> わたしにはこの行動が正しかったのかどうか批評することは実際できない。ただ、われわれの知恵があまりに浅はかであり、他人の心中を推し量る思慮が全くなかったことを嘆くばかりである。[11]

この結びから李劼人が自分たちの浅薄さを嘆いていると受け取る読者はほとんどあるまい。原文で用いる「聡明」、「智慧」の語の意味に含みを持たせて、婉曲に軍人の行動を批判していることは言うまでもないであろう。

李劼人は、「公館のため」だけでなく、他の文章でも軍人批判を展開している。ここでは、もう一つ、「飛行機が本当に来た」の語りを挙げておこう。[12]

四川の軍閥で唯一空軍を有したのは劉湘であるが、李劼人は、その空軍の「威力」を証明したエピソードを二つ記している。一つは、某師団長が試乗した飛行機が河に墜落した事件である。「こうして、某師団長は天仙から変じて水鬼となった。操縦士の行方はわからない」と、李劼人は語っている。もう一つは、劉湘が「謀臣勇士」を従えて爆弾の投擲訓練を参観していた際に、六十ポンドの爆弾が頭上に落ちてきた。李劼人は、「あっという間に数十名の死傷者が出たが、幸いに軍長〔劉湘〕の福分は大きく、火花一つ浴びることもなかった。後に外国人操縦士を尋問したが、「ミスだった」とだけ述べたそうだ」と記している。[13]

この後に、前述したように、成都に偵察機が飛来したこと、および翌日その偵察機に先導されて爆撃機が現れ、二発の爆弾を投下したことが記されている。

その日の正午になると、飛行機が果たして二発の爆弾を投下したが、ただ二十四軍の人の歯が笑いすぎて抜けそうになっただけという噂が広まった。それ以降、彼らは飛行機が張子の虎であることを見通した。[14]

他の軍閥にはない空軍を擁していても、飛行機の操縦や爆弾の投擲の技術が未熟なら、実際の役には立たず、こけおどしに過ぎないことを、李劼人は、幾分かのユーモアを含みながら皮肉な調子で語っている。

このように、『危城追憶』において、李劼人は、あるいは婉曲な言い回しを、あるいはユーモラスな表現を用いて、軍閥批判を展開しているが、加えて、戦時下における市民の表情を生き生きと伝えていることも指摘しておきたい。

人は、結局、動物の一種であり、無理やり数日の間、行動を制限された後に、いったん自由を得ると、自ずからエネルギーを尽くして街中をあちこちと這い回るものである。這い回らねば暮らしが立ち行かない者もあるが、暮らしのためでなくとも、ロビンソンでなければ、ついには関りのある親戚や知人を訪ねて、慰問をしたり、自分の無事を伝えたりして、あの数日間の制約の根本について互いに思い切り議論しようとするものだ。[15]

「兵をつかまえる」で、李劼人は、右のように、制約を受けていない状況にあっては、人は精力的に動き回

一〇

ると語っている。「開戦前の一瞥」で、「戦争がすぐに始まらないのなら、なぜずっと家の中でじっとしていなくてはならないのか」と言って、李劼人が出歩くのも、[16]「公館のため」で、市民たちが田軍の最後尾からすこし距離を空けてぞろぞろついて歩くのも、そうした人の性質のなせる業である。

以上に見てきたように、李劼人は、成都市民のもつ性質として、行動力や議論好き、物見高さといった諸点に言及しているが、「煤山を奪うこと煤山を均すこと」では、議論の中から知恵を生み出す力についても語っている。

「省門の戦い」で大きな被害にあった市民は、二度と再び市街戦が起きないようにするための方法について議論を始める。侃々諤々の議論の末に、一つの妙案が生まれた。

> それは、つまり義捐救済会が数千人の労働者を雇って、急いであの憎むべき煤山を削って平らにして、すでに泥土になっている石炭がらを他所へ運び出して低地を埋めることであった。[17]

すでに述べたが、当時の成都は、三軍閥によって共同統治されていた。市民は、「お上」でもあり、市街地破壊の当事者でもある軍閥に頼らずに、自分たちの力で煤山を均すアイデアを実行に移して、ついに戦時の拠点を消し去った。

『危城追憶』は、前述したように、「序」を含めて七編の文章によって構成されているが、各文章は必ずしも時間順に並べられていない。「開戦前の一瞥」が中ほどに置かれているし、「序」に続く「公館のため」は市街戦後の状況を語っている。「煤山を奪うこと煤山を均すこと」を末尾に配したことから、李劼人のどのような意図が読み取れるだろうか。

当時、一人だけ愚か者があって、とある小さな新聞に、その成都人特有の軽薄な口舌をふるって言った。「煤山を削った諸公に申し上げる。残りの勇気を以て、一気に成都の城壁も撤去し、家屋も撤去して、九里三分のだだっ広い空き地になされよ。地が老い天が荒れる時が来たとしても、成都で市街戦が起きてわれわれを驚かすようなことは決してないであろうこと、わたしが請け合おう。」[18]

市民が資金を出し合い、工事の進み具合を毎日楽し気に見物して、市内で最も高かった煤山が跡形もなく平地になったことで安堵のため息をついたその時に、そのことを皮肉った変わり者が現れたというのである。

李劼人は、成都市民の知恵と行動力を語って結びとすることに満足せず、さらに市民の行為に対して皮肉な批評を投げかける者の出現を語って、成都人が議論を好むこと、しかも皮肉な物言いを得意とすることを強調している。こうした議論好きと辛辣さとは、成都人の生命力の発露であると言っていいだろう。『危城追憶』を通じて、李劼人は、「危城」にあってもしぶとく生きる成都市民の生命力を密かに称揚しているのである。

四　田聞一による再現

「省門の戦い」から七十余年を経て、田聞一（一九四七～）は、小説の形式を以てこの戦いを再現しようとした。『成都巷戦一九三二』がそれである。ここで、小説の構成と田聞一の意図について見てみよう。

この小説は、すべて十二の章からなる。第一章「夜夢不祥」から第四章「刀光剣影」までは「省門の戦い」以前を、第五章「成都喫緊」から第七章「煤山決戦」までは市街戦の経過を、第八章「和平使者」から最後の第十二章「黒幕落垂」までは市街戦後の動向を、それぞれ叙述している。

一二

各章のタイトルは、右のようにすべて四字で揃えられているが、各章は、さらに三から六の部分〔以下、節という。〕によって構成されていて、節のタイトルは、たとえば、短いものは、第三章第四節の「劉督弁回家〔劉督弁、家に帰る〕」から、長いものでは、第十二章第二節の「暮鼓晨鐘、青灯黄巻、心情苦悶的田頌尭問道於相同経歴的大法師〔暮鼓晨鐘、青灯黄巻、心に苦悶を抱える田頌尭は、同じ経歴を持つ大法師に道を問う〕」まで、長短さまざまである。

語りは、伝統的な章回小説のように全知の語り手による。開戦以前の語りの内容を見ると、第一章「夜夢不祥」と第二章「幕後交易」では、主に、成都を訪れた日本人の武器商人の動きを語ることによって、市街戦の双方の当事者である劉文輝と田頌尭の人物や、彼らの置かれている状況を提示する。第三章「清明時節」では、四川軍閥の両巨頭であり、後に「二劉決戦」で対決する劉湘と劉文輝が顔を合わせる場面を設定する。ここでいったんは上海から遡航してくる劉文輝の武器輸送船団の通過を劉湘が認めるが、第四章「刀光剣影」では、一転して船団を差し押さえたために、劉文輝は、劉湘にとっては伯父にあたる長兄に依頼して説得を試みるが失敗し、ついには刺客を差し向けるがこれも果たせずというように、二劉の関係に亀裂が生じたことを語って、「省門の戦い」の背景としている。

「省門の戦い」本体については、第五章「成都喫緊」で、劉湘軍による瀘州攻略、劉文輝軍の軍事会議、劉文輝軍による四川兵工廠への先制攻撃、成都文人による停戦要求、鄧錫侯の青城山への一時的な隠遁を語るが、第六章「魑魅魍魎」では、両軍の戦闘から方向を転じて、四川兵工廠占領に成功した劉文輝軍の旅団長石少武の数々の悪行について語る。そして第七章「煤山決戦」で、劉文輝軍の軍事会議における石少武の先陣決定、田軍の精鋭である楊鋭連隊による頑強な抵抗、石少武旅団の最終的な勝利によって、劉文輝軍が田軍を圧倒したことを語る。

四川兵工廠および煤山での戦いに連敗した田軍は成都市街北部に押しやられたが、第八章「和平使者」では、田頌尭が、尹昌衡ら成都の遺老の出馬を請うて、劉文輝に停戦を呑ませることを語る。第九章「兎死狗烹」では、戦闘終了後も悪事を重ねる石少武が田軍に捕らわれて処刑される顛末を語る。第十章「以退為進」では、青城山に隠遁していた鄧錫侯が、劉文輝と田頌尭の求めに応じて仲介の労を取るべく成都に戻ることを語る。第十一章「山城晨霧」では、劉湘に目を転じて、劉文輝の依頼に応じて重慶に出向いた長老張瀾の休戦の要請にもかかわらず、劉湘が劉文輝への攻撃を継続することを決定することを語る。そして第十二章「黒幕落垂」では、田頌尭が引退の気持ちを持ち始めること、劉・田が鄧錫侯の仲立ちにより停戦協定の調印式を行う様を語る。

田聞一は、市街戦の叙述を、田軍が守る四川兵工廠と煤山での激戦に限定して、田軍がしかけた緒戦には言及していない。なぜだろうか。

これには二つの狙いがあるものと考えられる。一つは、劉文輝の攻勢、田聞一の守勢という図式を定めて、この図式によって語りを展開していこうという意図である。したがって、第五章では緒戦に言及していないだけでなく、第二節「劉文輝也要動手了〔劉文輝もまた攻撃を始めようとする〕」で、戦端を開くにあたって行われ、田軍に対する攻撃を決定した劉文輝の軍事会議を詳細に語っているが、田頌尭が劉文輝軍に対してどのような作戦をたてて臨んだのかについても触れていない。

もう一つは、劉文輝軍の旅団長である石少武を主役級に抜擢するためである。石少武は、平時は粗暴で殺人や姦淫を繰り返して、成都市民から恐れられるとともに忌み嫌われていたが、戦場に臨んでは勇猛果敢であり、劉文輝は石を切り札として重用していたのであった。[19] 田聞一は、この良くも悪くも有名な軍人の戦いを、第五章第三節「慘烈的戦鬪、在深夜時分突然打響〔熾烈な戦闘が深夜突然に始まった〕」、および第七章のすべての

紙幅を用いて、大いに語っている。また、石の悪行については第六章のすべての紙幅を用いて、最期については第九章のすべての紙幅を用いて、やはり詳細に語っている。『成都巷戦一九三二』において、田聞一は、この黒旋風李逵を思わせる旅団長を、軍閥の長である劉文輝・劉湘・田頌尭・鄧錫侯と肩を並べる主役の一人として登場させているのである。

以上に見てきたように、田聞一にあっては、攻守を単純化して捉えた図式と勇猛かつ粗暴な軍人の主役への抜擢によって、「省門の戦い」は、明快にして勇壮、読者の興味をかき立てる通俗的な味わいを付与されている。

五　田聞一の語り

『成都巷戦一九三二』は、演義体を用いた小説である。内容は基本的に史実に拠っているが、小説全体の枠組みの中で、史実を取捨選択し、或いはその扱いを大きくしたり、或いは小さくしたり、作者の意図に沿って組み合わせが行われる。前述した、攻守の単純な図式化や市街戦緒戦の削除、石少武の主役化などは、その結果である。

金文京氏は、『三国志演義』について次のように述べておられる。

そこでの物語は、誰でもが読めば容易に納得できる明らかな因果関係のもとに語られ、しかも読者の興味を引っぱってゆくだけの魅力をそなえていなければならない。そのためには史実をさまざまな形でアレンジし、場合によってはフィクションを用いることも必要となってくるであろう。[20]

田聞一が、第一章の冒頭に劉文輝が激しい戦闘を夢に見て目を覚ます場面を置いたり、第一章と第二章に劉文輝が日本人から武器を大量に購入する場面を、第四章に劉湘がそれらの武器を積載した輸送船団を差し押さえる場面を配して、劉湘の瀘州攻撃や劉文輝・田頌堯両軍による「省門の戦い」の契機としたりしているのも、因果関係をわかりやすく明らかな形にして語りを進めていこうとする意図の表れである。

田聞一の語りの特色としては、各章にそれぞれクライマックスを置いている点も挙げておかねばならない。

ある初冬の深夜のことであった。四川省政府主席であり、国民政府軍第二十四軍軍長、川康辺防軍総指揮を兼ねる劉文輝は、夢の中から悚然として目を覚まし、布団をかけたままで起き上がった。[21]

右は、第一章第一節「冬夜、梟梟遠去的更声、譲劉文輝心事沈沈〔冬の夜、時を知らせる銅鑼の音が次第に遠ざかると、劉文輝の心は重く沈む〕」、つまり小説の書き出しの一文である。

四川省の為政者であり、国民政府軍の軍長でもある劉文輝を跳び起きさせた夢とはどのようなものであったのか。田聞一の語りは、その後、夢の内容に触れることなく、読者をじらすようにして、劉文輝の経歴や人物描写、出身地である大邑県の紹介などに向けられていく。そうして第二節「秘密：左手做的事也不能譲右手知道〔秘密：左手がしたことは右手に知られてもならない〕」に至って、夢に現れたのは劉湘との激戦であったことが語られるのである。

まさに屍が野に満ち、勝負の決着が見えないその時、劉甫澄〔甫澄は劉湘の字〕がドイツから購入した十二機の黄色い翼の飛行機が飛んできた。すぐに、彼〔劉文輝〕が日本から輸入した二十機の新式戦闘機が

迎え撃った。（中略）「そんな言い方をするものじゃない。甫澄よ。お前はわたしを助けてくれたが、わたしもお前を助けてやった……。」「もういい。口ではあなたに勝てない。陰謀だってあなたに勝てやしない。」劉湘は憤然として彼の話を遮った。「わたしたち叔父・甥の間は、今日まさに一刀両断にしよう」と言うと、刀を振り上げた……[22]

読者はここまで至ってようやく夢の内容を知らされる。また、それは劉湘との激しい地上戦であり、空中戦であった。田聞一は、劉文輝の夢に現れた激しい戦闘場面を第一章のクライマックスとして置き、それによって読者の興味をかき立てるとともに、その後の展開を予告する役割をも担わせている。

これに続く第二章では、日本人武器商人の前に劉文輝が突如として姿を現す場面、第三章では、劉文輝と劉湘がさまざまな思惑を心中に秘めながら顔を合わせて言葉を交わす場面、第四章では、刺客が劉湘を襲う場面というように、田聞一は、各章にそれぞれクライマックスを設けて読者を語りに引き込んでいるのである。

さらに語りそのものについても見ておこう。成都の共同管理者の一人でありながら、「省門の戦い」には直接関わらずに、停戦協定の仲介人の役を果たす鄧錫侯についての語りを引いておく。

お前たちが戦いたいのならどうぞ。馬が牛を蹴り殺そうと、牛が馬を突き殺そうと、わたしには関係がないことだ。疲労困憊するまで戦ったら、わたし鄧晋康がお前たちのために話をつけてやらねばならないようになる。その時になって出て行っても遅くはない。これを何と言うか。「鷸蚌の争い、漁師丸儲け」と言うのだ。

これは怪しむに足りない。彼の一貫したやり方である。そうでなければ、どうして「水晶猴」のあだ名がついただろうか。このあだ名は、決して彼の名の中に「侯」の字があるからばかりではない。長年に渡って、

各種の勢力の間を巧みに動き回って、彼らの力を借りて自らの力を発揮し、才能を隠して表に出さず、自らの実力を維持してきたのであった。[23]

右は、第十章第一節「悠游於青城山、都江堰間的「水晶猴」〔青城山、都江堰の間に悠然と遊ぶ「水晶猴」〕」の語りである。中規模の軍閥である鄧錫侯は、楊森や劉文輝、劉湘といった大軍閥の間にあって、或いは生き残るために、或いは勢力拡大の機をうかがって、時にはあちらに味方し、時にはこちらにつくという綱渡り式の処世を重ねてきた。その鄧の処世術を述べ、人物を描写する語りにおいて、田聞一は、間接話法的な語りと、「馬蹋死牛、牛挑死馬」といった四字の慣用表現や、「鷸蚌之争、漁夫得利」の故事成語を用いたリズム感のある文体で、読者に耳を傾けさせる。また、「水晶猴」のあだ名によって、鄧の人物像のイメージを喚起させる方法も効果的である。

読者に耳を傾けさせる方法として、田聞一は、四川の人びとにとって日常生活の一部となっている竹枝詞や歇後語も効果的に用いている。後者の例を挙げておこう。

玉沙街公館で、弟の劉自乾〔自乾は劉文輝の字〕に会うと、劉昇廷は心痛の面持ちで言った。「劉甫澄は四季豆―油でも塩でもだめだ〔似ても焼いても食えない〕。[24]」

ここまで読むと、劉文輝は、密かに自らの僥倖を喜んで、事を速く進めてよかったと思った。そうしなかったら、省主席である自分は「猪八戒が鏡に顔を映す―中も外も人でない〔人に合わす顔がない〕。[25]」

一七

前者は第四章第二節「搬来説客去重慶〔説客を引っ張り出して重慶に出向かせる〕」からの引用で、六弟である劉文輝の依頼を受けて劉湘に差し押さえた船団を解放するよう説得に赴いた長兄の劉昇廷が、重慶から戻って、不首尾を弟に報告する場面である。

後者は第八章第三節「将計就計、借力発力〔他人のアイデアと力をいただく〕」からの引用で、尹昌衡および「五老七賢」と呼ばれる成都の長老たちの仲裁案に応じて、劉文輝が停戦に進んで同意したという形を示す場面である。

いずれにも人口に膾炙する歇後語が用いられている。随所に記載している竹枝詞もそうであるが、いずれも冗長な説明を要せず、一言で読者の心をつかむとともに、情景を容易にイメージできる役割を果たしていると言えよう。

六　語りの共通点

李劼人の『危城追憶』は、回想の形で四年前の「省門の戦い」を振り返っているが、その語りは、市街戦前後の成都の状況に固定されているわけではなく、時としてその状況に関係するそれ以前の事情、すなわち歴史的経緯などについても向けられている。

「戦地は屋根の上」では、劉文輝軍の兵士が重機関銃を据え付けようとして屋根を踏んで歩く音を曽先生が耳にした場面の後に、成都の家屋の屋根が重機関銃基地には不向きであることをひとしきり断っておいてから、話を曽先生に戻している。

「兵をつかまえる」では、眼前で行われている「拉夫〔人を拉致して兵士や軍夫にする〕」が、かつて

一九一六年に、成都に駐留していた北洋軍の陳宦によって行われていたことも語りに含めている。

また、「飛行機が本当に来た」では、冒頭で劉湘軍の飛行機が成都に飛来したことを述べると、話題をやはり陳宦に転じる。

その実、成都の上空に飛行機のエンジン音が響くのは、民国二十一年（一九三二年）十一月までなかったわけではない。中年で記憶力の良い人であればきっと覚えていることだろう。民国四年（一九一五年）に、陳宦が北洋軍の大部隊を率いて、成都で戒厳令を弄んでいた時、成都人の目を見開かせ、飛行機とはどういうものかを見せたことがあった。[26]

回想文においては、回想の対象となっている事件や人物にまつわる事象が想起されると、その想起された事象を書き付けていくことによって、語りが本題を外れて周縁に赴くことはないことではない。

『危城追憶』で、戦闘場面の描写よりもその周縁の事情に語りの重点が置かれているのは、李劼人が、成都の街そのものを、そしてその街に生きる人びとを語ろうとする意識を持っているからである。

田聞一もまたこのような周縁の語りを随所に挿し挟んでいる。成都の街では、将軍衙門（第五章第二節）や望江楼（同前第三節）、近郊の県では、大邑県（第一章第一節）や灌県（第十章第一節）、生活風俗では、四川料理（第二章第二節など）に関する記述を挿入している。ここでは、第一章第二節に見える玉沙公館の描写を見ておこう。

劉文輝には嗜好があり、住まいを好んだ。今は闇夜で、彼の公館の広大さや幽邃さ、快適さは見て取れな

いが、窓の前に立って外を見やると、それでもある種の達成感があり、気持ちが落ち着くのを感じた。成都にある彼の公館はこの一か所だけではない。（中略）その中で、街区の半ばを占めているこの玉沙公館が最も大きく、最も素晴らしかった。この玉沙公館は、中西折衷の建築であり、彼が最も愛する公館であった。[27]

玉沙公館の描写は六百字ほどであるが、この後に、すぐ上の兄である劉文彩が郷里に建ててくれた公館の描写がやはり六百字ほど続けられている。しかし、田聞一による周縁の語りで、分量が最も多いのは人物の経歴である。主要な人物である劉文輝や劉湘、鄧錫侯、田頌堯についてはもちろんのこと、尹昌衡や張瀾といった成都の長老たち、劉湘の部下で庶民に人気がある范紹増や劉従雲といった師団長の経歴に至るまで、些か冗長に思えるほど雄弁に語っている。

田聞一の語りの主眼は人にあるといってよい。公館の描写も、結局は人を語るためのものである。このように、田聞一もまた、演義体の形式によって、四川人を語ろうとしている。

こうして、形式の異なる二つの作品の語りを詳細に見てみた時、四川作家の特徴の一つが自ずと現れてくる。

おわりに

では、こうした、街を語り人を語る饒舌な叙述は、どのような背景があって生み出されているのだろうか。田聞一は次のように述べている。

わたしは、言葉が正確であることや生きていること、気持ちを伝え、感情を伝えることを努めて求めるよ

うにしていて、ことさらに深みを求めたりしない。文学作品は見やすく、読みやすく、誰もが楽しめるものであるべきだという原則をきちんと守って、大きな時代背景の下で、人物とその運命を展開し、その時期の風俗民情を展開しているのである。[28]

田聞一は、「時代背景」の枠組みを設定して、「人物」や「命運」を語るとともに、「風俗民情」をもその中に組み込もうとしている。

この点は、李劼人に通じるものがある。李劼人は、ここで検討した回想文だけでなく、以前、小論で取り上げてきたように、小説においても同様に、語りの対象となっている街や人物、風俗などについて、その歴史や全体像を俯瞰する記述を、時に長大な文章によって挿入する。[29]『死水微瀾』における成都の市場の描写、『暴風雨前』における茶館の描写、『大波』における皇城の歴史の語りなどがそれである。[30]

これらの語りに通底するものは、四川あるいは成都という郷里に対する愛情あるいは誇りであろう。そしてそれが、四川人あるいは成都人に対する愛情あるいは誇りにつながっていて、時に自慢するように、時に愛憎入り混じった口吻で、滔々と街を語り、人を語るという叙述を生み出したと言えるだろう。

注

（1）唐振常『俗軽集』（書友文叢）、漢語大詞典出版社、一九九八年、四八～五九頁。原文は以下の通り。

一是四川没有一個眞正統一全川且爲時長久的特大軍閥、更不能打出四川、只能在夔門以内稱英雄。（中略）二説四川特具的防區制。（中略）其三、二十餘年間、四川軍閥混戰次數最多、爲時最長。

（2）李白虹「二十年来之川閥戦争」（廃止内戦大同盟会編『四川内戦詳記』（近代史料筆記叢刊）、中華書局、二〇〇七年、二四八頁）によれば、民国元年から二十一年の「二劉決戦」以前までの間に、合わせて四七八回の戦闘が行われた。

（3）蕭波・馬宣偉『四川軍閥混戦（一九一七―一九二六）』、四川省社会科学院出版社、一九八六年、一四頁および二二頁。

（4）田聞一『成都巷戦一九三二』、解放軍文芸出版社、二〇〇六年、三七一頁。

（5）蕭波・馬宣偉『四川軍閥混戦（一九一七―一九二六）』、前掲注（3）、二六八～二六九頁。

（6）黄維徳・万金裕「軍閥統治成都的両個"連合弁事処"」（成都市政協文史学習委員会編『成都文史資料選編　防区時期巻』、四川出版集団・四川人民出版社、二〇〇七年、六六～六七頁）。

（7）李白虹「二十年来之川閥戦争」（廃止内戦大同盟会編『四川内戦詳記』（前掲注（2）、二六二～二六七頁）。今井駿氏によれば、劉文輝が九十近い市や県を防区として十三万人の兵士を擁し、劉湘が三十近い防区と十万人の兵士を擁していたのに対して、鄧錫侯は十余の防区と四万人の兵士、田頌堯は二十余の防区と五万人の兵士を擁していた。（今井駿『四川省と近代中国―軍閥割拠から抗日戦の大後方へ―』、汲古書店、二〇〇七年、一一七～一一八頁）。

（8）民非明『裂国　民国軍閥往時之西南軍閥』、貴州出版集団・貴州人民出版社、二〇一一年、一五三頁。

（9）李劼人『危城追憶』（『李劼人全集』第七巻、四川出版集団・四川文芸出版社、二〇一一年）。この文章は、一九三七年に、上海で刊行されていた『新中華』第五巻第一期から第六期にかけて連載された。

（10）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一二〇～一二一頁）。原文は以下の通り。

「依我們的想法、必不會蠢到如此地歩。」

「何況他公館又不止西丁字街的一院。九龍巷内那麼華麗的一大院、尚且不這樣保護哩。」

「自然囉！實在無特別保護的必要。我們四川軍人就只這點還聰明、内戦只管内戦、勝負只管有勝負、而彼此的私産、却有個默契、是不准妄動的、因此、大家也才心安理得的關起門來打。」

「何況他的細軟早已搬空、眷屬也早安頓好了。光爲一院空房子、也不犯着叫自己的兵士流血、叫百姓們再受驚恐啦！」

「是極、是極！從各方面想來、康久明總不會比我們還不聰明、這點點留守隊伍、一定在二十九軍進城之前、便會撤退的、巷戦的擧動、一定不會再有了！」

（11）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一二八頁）。原文は以下の通り。
我實在不能批評這種舉動的對不對、我只嘆息我們的智慧太低了、簡直没把握去測度別人的心意！
（12）「兵をつかまえる」における軍閥批判については、すでに小論「「抓壯丁」に見る四川作家の特色」（『アカデミア』文学・語学編第一〇三号、南山大学、二〇一八年）で論じた。
（13）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一四九頁）。原文は以下の通り。
這一下、某師長便從天仙而變爲水鬼、飛機師的下落、則不知如何。
および
據説登時死傷了好幾十人、幸而軍長福分大、没有碰着一星兒：後來審問外國飛機師、只供只是「我錯了」！
（14）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一五二頁）。原文は以下の通り。
那天下午、就傳遍了飛機果然投了兩枚炸彈、只是把二十四軍的人的牙巴幾乎笑脱了、從此、他們戳穿了飛機的紙老虎。
（15）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一三五頁）。原文は以下の通り。
人、到底是動物之一、你强勉的把他的行動限制幾天之後、一旦得了自由、他自然是要盡其力量、滿街的蠕動。有非蠕動而不能謀生的、卽不爲謀生、只要他不是魯賓遜、他終於要去看看有關係的親戚朋友、一以慰問別人、一以表示自己也是存在、搭着也得本能的把那幾天受限制的淵源、盡量批評一番。
（16）李劼人『危城追憶』（『前掲注（9）、一四二頁）。原文は以下の通り。
既是一時還打不起來、那又何必老呆在屋子裡？
（17）煤山を均す一件については、すでに小論「李劼人の辛辣―軍閥を見るまなざし」（『アカデミア』文学・語学編第九七号、南山大学、二〇一五年）で論じている。李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一五八頁）。原文は以下の通り。
就是由捐賑會雇幾千工人、趕緊把那可惡的煤山挖平、將已經變爲泥土的煤残渣、搬往別處去塡低地。
（18）李劼人『危城追憶』（前掲注（9）、一五八頁）。原文は以下の通り。
當時、只有一個糊塗虫、曾在一家小報上、掉着他成都人所特有的輕薄舌頭道：「致語挖煤山諸公、請你們鼓着余勇、

一口氣把成都城墻也拆了、房屋也拆了、拆成一片九里三分大的光壩子、我可担保、一直到地老天荒、成都也不會有巷戰的事來震驚我們的。」

(19) 石少武すなわち石肇武は袍哥であり、若いころから乱暴狼藉の限りを尽くしていたが、劉文輝の目に留まってその部下となり、旅団長にまで昇進するとともに、親子の誓いをも立てていた。旅団長になっても、行いは改まらず、人を殺し、女性を犯すことあまたであった。一九三三年八月に邛崍県で、劉湘側についた軍閥李家鈺に捕らわれて処刑され、首級は成都に送られて曝された（喬誠・楊統雲『劉湘』、華夏出版社、一九八七年、一三五～一三六頁）。成都市民は快哉を叫んで『石肇武銃殺』と題する講談や演劇などが上演されたという（唐振常『俗塵集』前掲、六一頁）。

(20) 金文京『三国志演義の世界』、東方書店、一九九三年、二一頁。

(21) 田聞一『成都巷戦一九三二』（前掲注（4）、一頁）。原文は以下の通り。

這是一個初冬的深夜。四川省政府主席兼國民政府軍第二十四軍軍長、川康邊防軍總指揮劉文輝從夢中悚然驚醒、擁被坐起。

(22) 田聞一『成都巷戦一九三二』（前掲注（4）、一五～一六頁）。原文は以下の通り。

正打得伏屍盈野、難決難分時、劉甫澄從德國購買的十二架黄翅膀飛機先飛來了、接着、他從日本買回的二十架新式戰闘機前去迎戰。（中略）「話不能這麼説、甫澄。你幫過我、我也幫過你……」「算了、我説不過你、搞陰謀也搞不過你。」劉湘憤然打斷他的話、「我們兩叔姪今天就來個一刀兩斷！」説着、提刀而上……

(23) 田聞一『成都巷戦一九三二』（前掲注（4）、二九七～二九八頁）。原文は以下の通り。

你們要打就打去吧、馬踢死牛、牛挑死馬、都不關我的事、一直打到你們筋疲力盡、需要我鄧晉康給你們撿角子了、我再出來不遅。這叫甚麼？這就叫「鷸蚌相争、漁人得利」。

這不足爲怪、是他一貫的作派。不然、他爲甚麼得一個「水晶猴」的綽號呢？這個綽號、決不僅是因爲他的名字中有一個「猴」。多年來、他極善於游走在各種勢力之間、借力發力、韜光養晦、保存自己的勢力。

(24) 田聞一『成都巷戦一九三二』（前掲注（4）、一一〇頁）。原文は以下の通り。

在玉沙街公館、見到六弟劉自乾、劉昇廷將手直搖、焦眉愁眼地説、「劉甫澄是四季豆—油鹽不進！」

(25) 田聞一『成都巷戦一九三二』(前掲注(4)、二七七頁)。原文は以下の通り。
看到這裡、劉文輝不由暗自慶幸、心想幸好我抓得快、不然我這個省主席就是「猪八戒照鏡子—裡外不是人」了。

(26) 李劼人『危城追憶』(前掲注(9)、一四六頁)。原文は以下の通り。
其實、成都天空中之有飛機的推進器聲、倒幷不等在民國二十一年(公元一九三二年)十一月、只要是中年人、記性好的、他一定記得民國四年(公元一九一五年)、陳二庵帶着大隊的北洋兵、在成都玩出警入蹕的把戯時、已經使成都人開過眼孔、看見過甚麽叫飛機的了。

(27) 田聞一『成都巷戦一九三二』(前掲注(4)、一六頁)。原文は以下の通り。
劉文輝有個嗜好、喜歓房子。雖然現在是黑夜、看不出他這座公館的闊大、清幽、舒適、但他在窗前一站、往外一看、仍然有種成就感、感到踏實。他在成都的公館不止一處、(中略)其中、尤以這座占了半条街的玉沙公館建得最大最好、這座玉沙公館便是中西合璧式、是他的最愛。

(28) 何煒「文化休克下的民国歴史文学造影—田聞一宏大歴史叙事和新歴史小説浪潮後的四川作家群」(『当代文壇』二〇〇九年第四期、四川省作家協会)。原文は以下の通り。
我力求語言准確、生動、傳神、傳情、不故作深奥・恪守文學作品應該好看好讀、雅俗共賞的原則、在大的時代背景下、展開人物及人物命運、展現那個時期的風俗民情。

(29) 小論「李劼人の成都描寫」(『中國文學報』第四十一冊、京都大學中國文學會、一九九〇年)。

(30) 李劼人『死水微瀾』第三部分「交流」第一節(『李劼人全集』第一巻、前掲、四七～五一頁)。同じく『暴風雨前』第一部分第十一節(『李劼人全集』第二巻、前掲、五一～五四頁)。同じく『大波』第三部第九章「成都也独立了」第三節(『李劼人全集』第四巻・『大波』(重写本・下)、前掲、一一一九～一一二一頁)。

追記　本稿は、平成三十一年度文部科学省科研費基盤研究(C)「文学を通じて見る中華民国期における軍隊の存在感と影響力についての研究」(課題番号18K00359)の成果の一部である。

Recreations of the Street Battling in Chengdu

——The discourses by LI Jieren and Tian Wenyi——

Hiroshi NAKA

Abstract

In 1932, a street battling between the two forces both in Sichuan was broke out in Chengdu. After four years, Li Jieren discoursed on this street battling in the form of retrospection, titled "Weicheng zhuiyi". Li Jieren gave a vivid description of the people's sufferings from this street battling, at the same time, leveled caustic criticism at the military cliques in Sichuan, from a standpoint of the people in Chengdu.

On the other hand, Tian Wenyi, in 2006, discoursed on this street battling in the form of novel, titled "Chengdu xiangzhan 1932". Tian Wenyi as a storyteller knows all about the street battling, directly told several scenes of battling, and set climaxes in most chapters, and sometimes narrate histories or situations of the important commanders of military cliques fully.

As Sichuan writers, however, their discourses have a common factor. These two writers both described some kinds of history of Chengdu at full length, for instance, some places rich in historical associations, some traditional customs, some famous foods of Sichuan and so on. This talkativeness and exhibition of their knowledge of Sichuan in their works is one of remarkable features of Sichuan writers.